

# 多様性を尊重する教育



**半澤 嘉博 (はんざわ よしひろ)**

東京家政大学児童学部初等教育学科長・教授

東京都八王子市の公立小学校教師を経て、東京都教育委員会指導主事、世田谷区教育委員会指導主事、都立特別支援学校教頭、都教職員研修センター統括指導主事、都教委主任指導主事、特別支援学校教育担当課長などを歴任。2008(平成20)年から東京家政大学で教員養成に従事。社会福祉法人東京都手をつなぐ育成会監事等も務める。

## 1 ダイバーシティ教育の重要性

ここ数年のAI技術の急速な進歩や社会のグローバル化、また新型コロナウイルス感染の拡大、国際紛争の勃発など、予測困難な出来事が日本の教育にも大きな影響を与えた。その中でも最も大きな影響は、学校内での一斉指導に基づく一律の教育方法や内容だけでは、授業や学級の運営がうまくいけなくなってきたことだ。このため、将来の学校教育では「令和の日本型学校教育」で示されている個別最適な学びや協働的な学びを積極的に取り入れていく必要がある。さらに「次期教育振興基本計画」(2023～2027年度)の基本方針等に示されている「持続可能な社会の創り手の育成」と「日

本社会に根ざしたウェルビーイングの向上」を目指す教育に変えていくことが求められている。

このような教育の大転換の中で特に重要なのは、多様な人々が共存し、よりよい社会を築くために、個性の違いを尊重し受け入れていく心情や態度を醸成する教育を推進していくことである。これが多様性尊重の「ダイバーシティ教育」である。このダイバーシティ教育の推進により、児童生徒は異なる文化的背景や経験、意見をもつ人々を受け入れ、幅広い視点やアイデアを共有し、互いに協力し合うことで、異なる考えやアプローチが交わり、さまざまな課題解決が可能となる。

また、ダイバーシティ教育は、すべての児童生徒に公平な学習機

会を提供することを通じて、誰もが自信をもって学習に参加できるようにする。さらに、国際的なコミュニケーション能力の向上や、相互理解や共感の促進、異文化間の対話能力の発展も期待されている。

## 2 教科指導でのダイバーシティ教育

### (1) 各教科での取り扱いの原則

各教科の指導においては、特に以下の三つの視点からの授業改善が求められる。

- ① 児童生徒の多様性を理解する
- ② 多様な教材教具を用いる
- ③ 自分らしく学べる環境をつくる

### (2) 算数・数学での取り扱いの工夫

表1に算数・数学の授業でのダ

授業改善の工夫	具体的な対応例
異なる学習スタイルへの対応	・口頭での説明やグループ活動等、学習スタイルに合わせた指導を取り入れる
文化的な背景や経験の尊重	・さまざまな文化的な視点や実生活の例を取り入れ、他の児童生徒の考え方も理解できるようにする
言語的なサポート	・授業で示す語彙や記号の意味を丁寧に説明する他、翻訳ツールや図形を活用する
個別の学習ニーズへの対応	・個別の学習ニーズがある児童生徒には進度や難易度を個別に調整する ・特別な教育ニーズがある児童生徒にはタブレット等を活用し補助教材や個別のサポートを提供して学習環境を整える。教材の活字の大きさや字体を変えるだけで効果的な場合もある
ジェンダー平等の促進	・男女の児童生徒が平等に活動したり、発言したりする機会を設ける

表1 算数・数学におけるダイバーシティ教育の取り扱い例

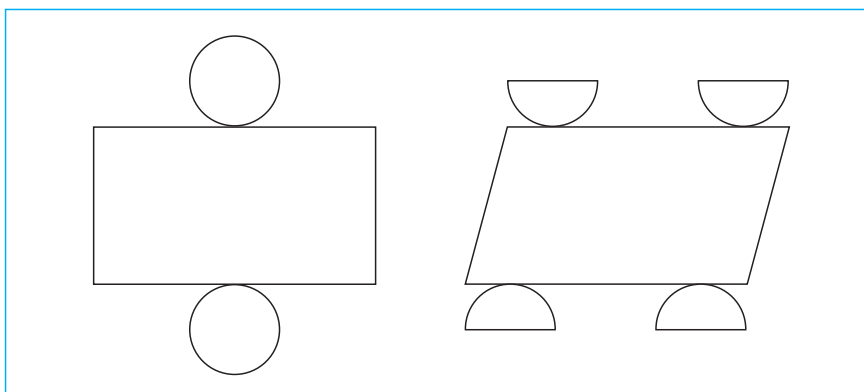


図1 円柱の展開図の例

イバーシティ教育の視点からの授業改善の工夫の具体的な対応例をまとめた。

児童生徒の多様な考えや発想を大事にした授業を行う例としては、小学5年の算数の立方体（円柱）の授業がある。展開図の指導では、図1のようにいろいろな展開図のパターンを考えさせることができる。

この学習は、基本的には辺の長さや円の直径等に基づき展開図を描いていく学習だが、その展開図のパターンは無限にある。協働的な学びで幅広い視点とアイデアを取り入れることができ、思考力を広げたり深めたりできる。

### (3) 特別の教科道徳での 取り扱いの工夫

学習指導要領では、特別の教科道徳における学習としても「物事を多面的・多角的に考える」視点が重視されているが、これがダイバーシティ教育とも深く関連している。授業の展開においては、単に教科書の事例を通しての議論ではなく、実際に一人ひとりの児童生徒が、多様な人々との交流や生活体験を通して、自分自身の意識の変容を自覚できるようにしていくことが重要である。

また、さまざまな内容項目を指導する際に、常にマイノリティの価値観と権利も擁護していく視点が重要だ。例えば小学校5・6年や中学校での他の人とのかわりに関する内容項目としての「寛容・謙虚」において、自分とは立場や状況が異なる人々との違いを受け入れ、互いに認め合う配慮や実践を話し合っていく授業等が考えられる。人間一人ひとりの個性を神経学的差異と捉え、お互いの違いを認識するとともに尊重していくことが重要であると石川准（元静岡県立大学教授）も指摘しているが、ダイバーシティ教育の推進には欠かせない視点である。さらに、無意識のバイアスや同調圧力の存在にも気づかせ、心の中の葛藤を想像することができる授業にしていく配慮や工夫も大切である。

### 3 学級経営での ダイバーシティ教育

教科学習だけでなく、学級経営においてもダイバーシティ教育の視点からの取り組みが大切だ。

特に、特別活動の領域としては、さまざまな人々との交流や体験活動の展開が重要となる。特別支援教育の視点からの交流及び共同学

習では、障がいのある児童生徒との継続的なかわりを通して、出来ないことや苦手なことのみに目を向けさせるのではなく、自分自身や他者の多様性を理解し、互いに尊重し合える関係性に気づき、それぞれの個性を生かし、協力して学ぶことのメリットを実感させることが大切である。また、生徒指導に関しては、改訂された生徒指導提要において多様性の尊重の視点からの具体的な取り組み例が多く示されている。それらを参考に、さらにSDGsの実現に向けて、ジェンダー、多文化共生、障がい等をキーワードとしたダイバーシティ教育の展開が重要である。

生命誌研究者である中村桂子（JT生命誌研究館名誉館長）は、一つの価値観の中で多様な人間や生き物を比較したり優劣をつけたりすることの無意味さを強調している。児童生徒の発達段階に即した平等や公平についての学習の大切さを改めて考えさせられる。

読者の先生方にも、ぜひ、ダイバーシティ教育を通して、自分とは異なる存在や考えに多く触れ、「共存」の意味を考え、自分自身の物の見方や思考を広げていく学びの大切さを児童生徒に伝えていってほしいと願っている。

<引用・参考文献>

石川准「多様性の社会学」静岡県立大学 石川准教授最終講義、2022.2.3

中村桂子「生きている不思議を見つめて」藤原書店、2021